様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２７ 年　 ６ 月 ２２ 日現在

機関番号：１２６１１
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2013～2014
課題番号：２５７８０３０７

研究課題名（和文）多職種協働の困難とサービス受給者への影響―高齢者の口腔ケアを事例として―

研究課題名（英文）Challenges in Providing Oral Care to Elderly Adults Receiving Institutional Care in Japan

研究代表者
宝月　理恵（HOGETSU, Rie）

お茶の水女子大学・リーダーシップ養成教育研究センター・特任講師

研究者番号：１０５７１７３９

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,200,000円

研究成果の概要（和文）：近年、高齢者の食支援、肺炎予防の目的で、口腔ケアの重要性が提起されている。しかし高齢者介護の現場において、口腔ケアは十分に浸透しているとはいえない。本研究は、その要因の一端が、専門性が異なる多職種の協働状態にあるのではないかと考え、口腔ケアに関与する多職種が協働する現場で惹起されうる問題を把握し、それがサービス受給者にいかなる影響を与えているのかを明らかにすることを目的とした。資料分析、参与観察、グループインタビューから、スタッフの人員不足、ケアの優先度の他に、サービス受給者の家族との関係性や、身体化された口腔ケア習慣が、施設における口腔ケアの円滑な実施に関与している可能性が示唆された。

研究成果の概要（英文）：Recently, in Japan, oral care for the elderly has received increased attention due to the realization that it can help prevent aspiration pneumonia and improve eating and swallowing ability. However, neither facility-based nor homecare services have fully implemented oral care for the elderly, especially those requiring nursing care. This study examines barriers to implementation of oral care, via in-depth group interviews of oral care providers, participant observation, and a content analysis of journals of various professional associations. The results are as follows. First, oral care for the elderly in medical institutions is more effective than that in facilities. Second, the patients’/service recipients’ family relationships affect implementation of oral care. Third, their longstanding cultural habits related to dental care affect autonomous oral care in facilities. Finally, oral care has low priority due to chronic manpower shortage especially in public facilities.

研究分野：医療社会学

キーワード：口腔ケア　高齢者介護　多職種協働　専門職研究　食支援

１．研究開始当初の背景

近年、高齢者の口腔（こうくう）ケアに対する関心が、医療および介護の分野において高まってきている。

その背景のひとつとして高齢者の摂食・嚥下機能の向上に関心が向けられ始めたことがあげられる。一般的に、加齢により食べる機能※1は低下するが、疾患やそれに伴う治療、介助状態によっていちじるしく当機能が低下する場合がある。このような状況下でリスクが高まる誤嚥性肺炎※2を予防するために、病院や診療所において口腔ケアが見直され始めているのである。同時に、胃ろう・経管栄養への過度の依存から脱却し、口から食べる力を回復することによって、患者の体力を増強し、患者自身が食べる楽しみを享受することが目指されている。

※1咀嚼し、唾液と混ぜ、飲み込む機能

※2唾液や飲食物が食道ではなく気管に入ってしまうことによって引き起こされる肺炎

介護施設や在宅医療においても、高齢者の口腔ケアへの取り組みが始まっている。脳血管障害、心臓疾患、糖尿病等の悪化と口腔状態（歯周病）との関連性が医学的に明らかにされてきたことも影響し、日常的な予防ケアが推奨され始めているのである。

しかしながら、とくに介護施設や在宅医療の現場においては、口腔ケアの普及が進んでいないことが指摘されている。厚生労働省の「平成 23 年（2011）医療施設（静態・動態）調査」によれば、「在宅医療サービスの実施状況」において、歯科医師や歯科衛生士による訪問診療や歯科衛生指導は全施設数の 1 割前後にとどまっている。
(http://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/iryosd/11/dl/1-3.pdf)

２．研究の目的

口腔ケアの重要性が認識されているにもかかわらず、なぜ普及しないのか。本研究は、高齢者を対象とした口腔ケアが複数の医療専門職および介護職が協働する現場において実施されていることに着目し、口腔ケアに関与する多職種が協働する現場で惹起されうる問題から、口腔ケアの実施状況を検討することを目的とした。

このような着想を得た背景には、研究代表者が 2012 年に実施したインターネットによる「高齢者の口腔ケアに関する調査」(n=200) の結果がある（本調査対象者の職種割合を表 1 に示す)。本調査における、「職種の異なる複数の専門職が協働・連携する場合、『口腔ケア』および『口腔機能向上訓練』の実施に関して困難な点や問題を感じる点はありますか」との質問に対し、その回答割合は、「ある」47.9%、「ない」23.4%、「わからない」28.7%であった。

表 1．調査対象者の職種割合

	回答数	%
介護福祉士	99	49.5
看護師	32	16.0
栄養士･管理栄養士	9	4.0
理学療法士	10	5.0
作業療法士	10	5.0
生活相談員	4	2.0
介護施設その他	16	8.0
訪問介護員	14	7.0
その他	6	3.0
合計	200	100.0

すなわち、半数近くの対象者が、困難や問題を感じていると回答しているのである。他方で、回答者（高齢者の口腔ケア従事者）は、以下のような理由により、今後高齢者介護の分野で「口腔ケア」「口腔機能向上訓練」の重要性が増していくと考えていることも明らかになった（表 2)。

表 2. 口腔ケアの重要性が増していくと考える理由(MA)

重要性が増していくと思う理由	%
窒息、誤嚥予防効果	63.5
感染症予防効果	53.5
食べる楽しみの増大	44.0
低栄養の改善、脱水予防効果	40.5
介護保険における予防理念の重視	47.5

※上位 5 つを掲載

このような背景より、口腔ケア従事者がケアの重要性を認識しているにもかかわらず、実際には口腔ケアが十分には普及しない要因のひとつとして、多職種協働という状況が関与しているのではないかという仮説を立てた。

３．研究の方法

研究の方法として、以下の三点を計画した。

(1) 資料分析のための枠組・理論の探求
(2) 当事者へのインタビュー調査、および口腔ケアの提供される場（高齢者介護施設、在宅ケア）での参与観察
(3) 口腔ケアに関わる各職能団体発行の機関誌の記事収集、分析

研究期間中に実施したのは、(1)および(2)である（(3)については今後実施予定としている）。

(1)の文献調査については、国内外の口腔ケアに関連する文献の検索と収集を行った。日本語文献においては、「口腔ケア」「高齢者」「歯科医療」「多職種協働」等のキーワードで検索し、約 70 件の論文等を収集した。これらの文献の多くは、医療及び介護の現場をフィールドとした従事者（ケア提供者）による実証研究であった。これらの文献を分析す

ることにより、高齢者医療・介護における口腔ケアシステムの現状と課題の把握を試みた。

一方、英語文献においては、”Health Professionals” “Elderly Oral Care” “Sociology of Professional Groups” “Inequality within Professions” “Inter-professional Collaboration”等をキーワードとして文献検索を行った。その結果、45 件の文献を収集した。これらの文献からは、分析の枠組みや理論を参照した。

次に、(2)のフィールドワークについては、参与観察とグループインタビューを行った。研究代表者は、平成 22～23 年度の科研費研究において、歯科衛生士のインフォーマントを複数人得ることが出来たが、その縁を通じて、東京八王子を中心に活動している「多職種と共に食支援を考える会」に参加する機会を得た。本会は歯科医師、歯科衛生士、栄養士などの複数の専門職種が集い、摂食嚥下の支援を含む口腔ケアについて、勉強、意見交換会を行っている。当会の世話人をされている歯科衛生士の女性に、訪問口腔ケアに同行させてもらい、在宅での口腔ケアがどのように行われているのか、参与観察を行った。

さらに、リサーチモニター会社（リサーチ専門データベースに登録されたモニター紹介を業務とするマーケティング会社）に協力を依頼し、首都圏近郊で口腔ケアに日常的に関与している看護師、介護福祉士、ホームヘルパーを対象として選定し、5 名ずつのグループインタビュー（各 2 時間程度）を 2 回実施した（選定にあたって、インターネットを使用したスクリーニング調査を事前に実施した）。グループインタビューでは、in-depth で積極的な議論が交わされた。インタビューを通して、口腔ケアがどのように実施されているのか、病院と介護施設での実施の目的や形態の違いは何か、口腔ケアの阻害要因は何かについての知見を得た。

４．研究成果

現在、収集した資料の分析を継続して行っている段階であるが、現時点で明らかになっている研究結果を記載する。

グループインタビューの対象者カテゴリーは、病院勤務の看護師と、介護施設勤務の介護福祉士・ホームヘルパーに分類された。各所属施設による差異は無視できないが、共通性として指摘されうる点がある。第一に、病院では高齢者の口腔ケアがかなり浸透してきているということである。第二に、家族という要因が、施設における口腔ケアの円滑な実施にかなりの程度関わっているということである。第三に、地域性に根付いたサービス受給者の長年の口腔ケア習慣という要因を指摘できる。最後に、上記に加え、高齢者介護施設においては、人員の不足やケアの優先度の問題により、口腔ケアが十分には実施されていない（口腔ケアの優先度の低さ）。

本研究は、多職種協働という要因が、口腔ケアの十分な実施に困難をもたらしているのではないかという仮説からスタートしたが、上記に示した調査結果により、この仮説自体を修正する必要性があることが示唆された。以下に詳細を述べる。

⑴医療機関（総合病院―療養・一般病床、ケアミックスともに―）においては、胃ろうや IVH（中心静脈栄養）を必要とする寝たきり患者（全介助状態）も多いため、看護師を中心とした口腔ケアが、日常的に必要なケアとして相当程度実現しており、また多職種協働（歯科医、歯科衛生士、言語聴覚士等）も機能しているとみるべきである。これは、口腔ケアが、患者が受けるべきケアのひとつとして（誤嚥性肺炎や痰による窒息等を防ぐために）制度的にも定着してきている（加算対象になっている）ことを意味している。このことが在院日数の短縮を促し、病床利用率の向上に寄与しているとみなされている点も無視できない。

一方、高齢者介護施設では多職種協働が行われる段階にまで至っていないのが現状である。有料ホームでは定期的に歯科医・歯科衛生士がケアに関与している場合もあるが、介護スタッフとの日常的な連携等はほとんど見受けられない。また、通所介護や特別養護老人ホーム等では、タイムスケジュールの問題や人員の不足から、十分な口腔ケアの実施に至ってはいないということが示唆された。

⑵口腔ケアに必要な用品は比較的費用が嵩むため、患者・サービス利用者の家族の同意がなければ、十分な口腔ケアの実施が難しい場合がある。他方で、口腔ケアに関心が高い家族の場合は、患者の口腔ケアの実施に対する促進要因になりうる。すなわち、家庭のみならず施設での口腔ケアの実施にも、患者・ケア受給者の家族関係が反映されているとみなさなければならない。

⑶ 地域性に根付いたサービス受給者の長年の口腔ケア習慣は、高齢者介護施設に入所する、比較的自立度の高い高齢者に対して自主的な口腔ケアを促すさいの阻害要因になりうる。自主的なケアには意識づけが必要であるが、磨き方はもちろん、磨くという行為自体も、サービス利用者がこれまでどのように歯科衛生、口腔ケアを行ってきたかという身体化された経験に多大な影響を受ける。これは世代によってある程度一般化できうる身体化の問題であり、研究代表者がこれまで行ってきた日本における口腔衛生（歯科衛生）についての歴史社会学的研究が重要な知見を提供しうる。

(4)介護人員が十分でない介護施設においては、口腔ケアの優先度は低い。義歯の夜間預かり等は実施しているが、他のケアと比較して時間を割くことが出来る状況ではないことが多い。認知症の利用者が多い場合は、見守り、転倒予防などが第一に優先されている現状があり、口腔ケアを充分に実施する環境が十分に整っていない。

今後、上記(1)から(4)の知見をより深く検証し、また追加調査を実施したうえで、学会報告や論文として公表していく予定である。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　０件）

〔学会発表〕（計　０件）

〔図書〕（計０　件）

６．研究組織
(1)研究代表者
宝月理恵（HOGETSU,Rie）
お茶の水女子大学・リーダーシップ養成教育研究センター・特任講師
研究者番号：10571739

(2)研究分担者　なし

(3)連携研究者　なし